2023年3月26日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

終着駅の食事

［ルカによる福音書22章7～23節］

過越の小羊を屠るべき除酵祭の日が来た。イエスはペトロとヨハネとを使いに出そうとして、「行って過越の食事ができるように準備しなさい」と言われた。二人が、「どこに用意いたしましょうか」と言うと、イエスは言われた。「都に入ると、水がめを運んでいる男に出会う。その人が入る家までついて行き、家の主人にはこう言いなさい。『先生が、「弟子たちと一緒に過越の食事をする部屋はどこか」とあなたに言っています。』すると、席の整った二階の広間を見せてくれるから、そこに準備をしておきなさい。」二人が行ってみると、イエスが言われたとおりだったので、過越の食事を準備した。時刻になったので、イエスは食事の席に着かれたが、使徒たちも一緒だった。イエスは言われた。「苦しみを受ける前に、あなたがたと共にこの過越の食事をしたいと、わたしは切に願っていた。言っておくが、神の国で過越が成し遂げられるまで、わたしは決してこの過越の食事をとることはない。」そして、イエスは杯を取り上げ、感謝の祈りを唱えてから言われた。「これを取り、互いに回して飲みなさい。 言っておくが、神の国が来るまで、わたしは今後ぶどうの実から作ったものを飲むことは決してあるまい。」それから、イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えて、それを裂き、使徒たちに与えて言われた。「これは、あなたがたのために与えられるわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい。」食事を終えてから、杯も同じようにして言われた。「この杯は、あなたがたのために流される、わたしの血による新しい契約である。しかし、見よ、わたしを裏切る者が、わたしと一緒に手を食卓に置いている。人の子は、定められたとおり去って行く。だが、人の子を裏切るその者は不幸だ。」そこで使徒たちは、自分たちのうち、いったいだれが、そんなことをしようとしているのかと互いに議論をし始めた。

1. 「最後の晩餐」―特別なこと

今日はいわゆる「最後の晩餐」の記事の部分を、その準備の話も含めて少し長く朗読して頂きました。

はじめにこんなことを言ってしまうのは教会の牧師としてはよくないことだと思うのですが、私はこの主の「最後の晩餐」を良くは理解出来ないままであります。恐らく一生分からないままであると思います。でもそれでも良いのではないかと思っています。私が大事にしたいと思っていることは、イエス様がこの食事をご自分の「記念」としてずっと行ってほしいと願われたこと、そしてそれを私たちは、時代や国境を超えて「受け続ける」ということです。感謝して「受ける」んです。私たちの教会では月の第一の日曜日に「主の晩餐式」を執り行っていますが、あれは牧師が偉そうに提供しているのではなく、提供者はイエス・キリストです。イエス・キリストが今もこの教会の中に生きておられて、パンと杯を分け与えながら、「これはわたしの体」「これはわたしの血汐であり、新しい契約である」と、私たちに、キリストの命そのものを付与して下さっている事柄だと思うのです。

今日の聖書箇所では、その最後の晩餐を‟準備する”所から主は深く心を込めていらっしゃる、ということが分かります。弟子の二人ペトロとヨハネを遣わして、弟子たち皆で、出エジプトの解放の出来事を思い起こす「過越の食事」を開くことが出来る空間を準備せよというのです。二人はどうしたらよいのかと思ったと思いますが、主は、あなたたちは都で水瓶を運んでいる男と出会うので、彼

に尋ねれば後のことは案内してくれる、というようなことをおっしゃいます。果してその通りになりました。二人はきっと思ったでしょうね。ああ、これから起こることは普通のことじゃない、神様が全てを整える特別な事なのだな、と。そして、ある場所の二階の部屋が用意されました。食事の時間になった時、イエス様はこのようなことをおっしゃいました。22：15です。「イエスは言われた。「苦しみを受ける前に、あなたがたと共にこの過越の食事をしたいと、わたしは切に願っていた。」―「切に願っていた」というのは、「願いに願っていた」という意味です。

1. イエスの思い、ここに極まれり

　よく電車などの終点の駅のことを「ターミナルステーション」（終着駅）と言いますよね。私は聖書を読んで、あ、この最後の晩餐の時というのは、イエス様が弟子たちと共に最後に何をするのかということを強く望んでいた「終着駅」なのだなと思いました。これ以降、イエス様は食事をなさいません。それどころか、その後の夜の中で、主は捕えられてしまうのです。そうなるということを主イエス様は前々からご存知でした。事実、何度も自分は捕えられて殺されるということを予告されていました。主は「時」がやって来たことを悟っておられたのでしょう。もうこの電車は引き返すことはない。神が示す最終地点に行こう、弟子たちと一緒に行って、そこで私自身が過越の羊となって、あなたたちに罪の赦しと命を約束する食卓を何としてでも開こう！と決意されたのだと思います。

弟子たちにとっては、これはビックリ仰天な食事でした。なぜかと言えば、主は、「このパンはわたしの体」、「このぶどう酒はわたしの血汐」と、言ってみれば、私を食べ、わたしを飲め、と促しているのです。わたし自身をあなたの命、血肉として欲しい、そのためにわたしはこの最終地点まであなた方とやって来た、とおっしゃっているように思えてなりません。神様の独り子としてのイエスの思い、ここに極まれり、だと思います。

私はキリスト教信仰というのは、何か理論を学ぶことでも、或いは社会的・政治運動をしていく、ということもその主眼ではなく、主イエス・キリストの思いを受け取るということではないかといつも思わされています。思いを受け止める。これは人間関係においてもそうですよね。毎日のように会っていても遠い関係というのはある訳で、その人の「思い」が見えなかったり、誤解しているような時はそうですよね。けれども、あまりおしゃべりしなくっても基本的に信頼出来る関係というのもあります。それはその人の「思い」を受け止められるし、信じられる時ですよね？

聖書は、イエス様が、これでもかこれでもかと、私たち目がけて「わたしの愛を受け止めて欲しい、わたしの愛を信じて欲しい」と迫ってくる書物だと思います。それはアタマの学びじゃないです。私たちの心が主に開くことですよね。

1. 「私はあなたのために祈った」

そしてイエス様は、私たちの信仰の脆さもよくご存じでいらっしゃるのです。今日の聖書箇所の中でも弟子の裏切りが暗示されています。その後の記事では、弟子どうしで誰が一番番偉いのかなどという議論（？）も起こしています。更には、ペトロがやがてご自分を否認することもご存じの上で31、32節でこうおっしゃっていますよね。「シモン、シモン、サタンはあなた方を、小麦をふるいにかけることを神に願って聞き入れられた。しかし、わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい」。

私自身、今、このことばに圧倒されています。主イエスが、個人的に私たちのために祈っていて下さっているのですよ！凄くないですか？私たちは、決して自分の力で信仰を保っているのではないのです。裏切る私たち、或いは、すぐに自分は偉いか偉くないかなどと人間のものさしを基準にして高ぶったり、傷つけ合ってしまう私たちです。そういう私たちは、神様のことも役立たないと思ってしまったら、教会に行くこともなくなってしまうでしょうし、丸で紙屑のように神様も信仰も捨ててしまうことも起こる罪深く、弱い私たちなのです。しかし、このイエス様です！―「サタンはあなた方を、小麦をふるいにかけることを神に願って聞き入れられた。しかし、わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。」「祈った」。しかも、未来形でなく、事実祈った、と仰っています。「祈り」というのは、その人のことを時間をかけて思うことに等しいです。そうでないと祈れません。イエス様が、私たちのことを本当に心にかけていて下さっているのです！心配して下さっているのです。「心配」というのは愛です。もし子供がいて、「もう僕のことなど心配しないで放っておいてくれ」と言われたら親は傷つくと思います。神様は、イエス様は、私たちを手離したくないし、手離さないんです。たとえ私たちが離れようとしても！それが「最後の晩餐」・「主の晩餐」です。わたしの生涯の最後の食事を一緒にしたい。この十字架が迫る時の中で、あなたたちとパンと杯を交わしたこの絆は決して消えるものではない、いや、実はこれは最終地点ではなく、やがて訪れる神の国で与えられる食卓の前味わいでもあるんですよ、と、私たちとイエス様の交わりが永遠に続くことの約束でもあるのです。きっと、私たちの「救い」は私たちの実感を超えて、素晴らしい贈り物として、神様がイエス様を通して既に用意して下さっているのだと思います。それを私たち、信じて良いのです。このパンと杯は他ならぬあなたのために用意されたものなのですから。

さぁ、来週の日曜日は、新年度が始まる日曜日であり、4月の第一日曜日です。教会歴では、その週の金曜日に主が十字架にかかられる「受難週」となりますが、礼拝の中で「主の晩餐式」を執り行います。イエス様が下さる救い、その十字架の贖いを示すパンと杯に与るその出来事を持って、私たち自身も、そして教会も、新しい2023年度を歩み始めたいと思います。お祈り致します。

主イエス・キリストの父なる神様、今日の礼拝を感謝致します。今年度最後の今日の礼拝も祝福して下さり、ありがとうございます。私たち一人ひとりのためにあなたは祈って下さり、また、あなたとの交わりである晩餐も整えて下さり、そのようにして私たちを捕えていて下さっていることを心から感謝致します。どうか主よ、あなたの「思い」を、いつも心開いて聴き、受け止めていく信仰を与えて下さい。この3年近く、コロナでなかなか教会学校も、愛餐会も持つことが難しい中を通されて参りましたが、どうか新年度、あなたが道を開いて下さり、私たちを励まして下さいますように。今日、ご体調が不調だったり、お休みせざるを得なかった、教会に連なるお一人ひとりにも確かなあなたの守りと導きがございますように。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。